

# 1920年代初頭における日本と中国の女性定期刊行物

—呉覚農が紹介・論争した女性運動論からみる—

前 山 加奈子

## 一.

呉覚農は後に「茶者聖」といわれた。その名の通り茶学を発展させて、新中国成立後間もない時期（1950年～52年）に、農業部副部長と中国茶葉公司經理（社長）を兼任して茶葉業を促進し、国内販売量の増加だけでなく輸出量も引き上げた。また専門家育成の道を築いた<sup>1</sup>。そのような呉覚農が、日本留学前後にまったく分野の異なる、女性関連の訳著述を多く発表していたことは、すでに拙稿「Y. D. とは誰か—日本の女性問題を紹介・論評した呉覚農について」<sup>2</sup>において述べた。それは西欧の近代市民思想や社会・政治制度が直接・間接的に中国に入り始めた時期に当たっている。志す専門領域が何であれ、当時の青年たちは自らの生涯をどのように生きるべきか模索し、至近の家族・婚姻問題から社会における女性問題全般へ関心の領域を広げていった。そこには伝統と規範だけでなく、経済構造や法制度などが強固に絡み付いていることを知り、新しい状況を求めていった。

呉覚農の訳著述の中で、家族や婚姻問題などに関するものは、前述の拙稿「Y. D. とは誰か」で取り上げた。本稿ではそれを踏まえ、あらたに女性運動に関連するものを扱う。そして関連分野を中心に当時の日本における女性関連の刊行物を紹介しながら相互の関係性や背景を考えていきたい。ここでは性別を表すのに、執筆者は「女性／男性」を用いるが、引用文中は原著に記載された「女子／婦女／婦人／女性」をそのまま敢えて統一せずに用いる。

## 二.

呉覚農は1897年浙江省上虞に生まれ、杭州の浙江省甲種農業専科学校で学んだ。母校で助手を勤めた後、公費で1919年に日本へ留学した。その年は周知のごとく五四運動の年でもあり、呉覚農たち浙江省の学生たちも運動の渦中にあった。女性問題に関心を抱いたのもこのような新しい運動と緊密な関連性を持っていたといえる

だろう。

日本留学前に呉覚農が執筆したものは、『婦女雑誌』に書いた「蜜蜂飼育法」(1: 11 1915年11月)と「牡丹栽培法」(4: 12 1918年12月)であった。前述したように呉覚農は農学を専攻し、日本留学に当っては、特に茶葉を選んだ。この分野での留学志望者が少ないため、官費留学生となれる可能性が比較的大きかった<sup>3</sup>ことがその理由であった。初めから茶葉研究を志したものではない。

留学前後の1919年から1929年の10年間に、呉覚農は上海における革新的な女性刊行物に多くの訳述や著述を載せている。そのため、後に作家となった夏衍(本名は沈瑞先)は、当時の呉覚農を「婦女運動の活動家」と思い込んでいた<sup>4</sup>と述懐しているほどである。呉覚農が活動家といわれるほど実際の女性運動に参加していたかどうかは不明だが、呉覚農はその「婦女問題」をテーマにして本名以外に Y. D. や詠唐というペンネームを用いて<sup>5</sup>『婦女雑誌』だけでなく、『婦女評論』(『民国日報』副刊),『婦女声』,『現代婦女』(『時事新報』副刊),『婦女週報』(『民国日報』副刊),『新女性』にも原稿を送っていた。

これらの執筆活動は女性問題への関心・問題意識に基づくだけでなく、同時に原稿料によって生計を図るためでもあった。呉覚農は自分のためだけでなく、留学を終え帰国後仕事のない夏衍のためにもベーベルの『社会主義と婦女』を提供して、翻訳料取得の手立てを図った。定職のない知識人や反体制派の思想家や活動家にとって、国外の新しい思想の受容紹介は自他ともに要求されていた。また新しい刊行物を出す出版元にとっても、翻訳者や紹介者は必要とされていたのであった。当時新しい思想を提供する側であった日本においても、思想家たちが吸収し構築した思想を筆先から時間をおかず文字化していった。彼らの執筆活動もまた呉覚農たちと同じように、生計を意図するものでもあった<sup>6</sup>。当時の上海は、中国の中でも特に出版業が盛んで、定期刊行物の種類、部数とも最多であった。

このような出版環境において、女性向けの定期刊行物もその例外ではなかったが、女性刊行物はほとんどが1~2年のごく短い期間しか発行されていない<sup>7</sup>。例外は宗教界のバックグラウンドをもつ『女鐸』<sup>8</sup>『節制』<sup>9</sup>『女青年』<sup>10</sup>や職業意識のある『女蠶』<sup>11</sup>以外には、わずかに『婦女旬刊』(1917~1948)と『婦女雑誌』(1915~1931)を挙げることが出来るだけである。呉覚農が発表した女性刊行物は、『婦女雑誌』『婦女評論』『婦女声』『現代婦女』『婦女週報』『新女性』であるが、これらの刊行物は以下のような歴史を示す。

1921年8月創刊の『婦女評論』、同年12月創刊の『婦女声』、婦女問題研究会と中華節制研究会が合同編集した『現代婦女』、『婦女評論』と『現代婦女』が合併し婦女問題研究会が出した『婦女週報』、1919年から章錫琛が編集主幹であった『婦女雜誌』やその後1926年に創刊された『新女性』、これらの編集者と執筆者の中心には李達、陳望道、夏丏尊、胡愈之がいて、その周りに革新的な「浙江グループ」の青年たちがいた。彼らには地域的・思想的に密接な関係性があり、それは一連の系統性をもって継続されていったことが明らかである<sup>12</sup>。また一連の系統性を日本との関係で見ると、執筆陣に李達、陳望道、夏丏尊、章錫琛、沈雁冰、周建人、任白濤など日本留学経験者並びに日本語習得者が多いことを特記しなければならないだろう<sup>13</sup>。

### 三.

吳覺農の結婚と離婚に関する訳著述は、西槓論文<sup>14</sup>や前述の拙稿で取り上げているため、ここでは主として女性運動に関するものを見ていく。吳覺農には同時期に農民運動や労働運動に関する著述もあるが、それらは主に編集部にいた親友の胡愈之を通して『東方雜誌』に発表された<sup>15</sup>。また彼を通して「五四」以来『婦女雜誌』の主幹であった章錫琛と知り合い『婦女雜誌』にも投稿するようになったのである<sup>16</sup>。

吳覺農の女性運動に関する訳著述は本稿付録の「吳覺農の著述・訳述関連一覧表」から明らかなように、他のテーマを取り上げながら同時進行的に行われていた。しかし恋愛、家族、離婚という問題が前半に多く扱われているのに比べ、女性運動関連は後半の1922～23年に多く目に付く。それは彼の問題意識がその2年間に集中していたとみるか、歴史が彼に女性運動へ目を向けさせたというべきか、この点については後述したい。

吳覺農の女性運動に対する見解の公表は、まず1922年11月に奚明<sup>17</sup>が「婦女運動の四大潮流」を『現代婦女』第9期に発表したことから始まる<sup>18</sup>。奚明は女性運動を「4つの主要な潮流」、即ち次の4系統に分けて論じる。

1. 「中上階級の婦女による」キリスト教の婦女運動
  2. 「中上等の階級の人が多数を占める」婦女参政運動
  3. 「第四階級の労働婦女が多数」の社会主義の婦女運動
  4. 「婦女の最も重大な責任は未来の人類を創造することだと考える」母権運動
- これに対し、吳覺農は女性運動を4種類に分けることについては、異論はなく、彼

自身日本の婦人運動家を同様の分類で、1. 宗教的慈善運動家 2. 女権運動家 3. 母権運動家 4. 労働階級の婦女運動家 としている<sup>19</sup>。

しかし4種類に分けたうち、呉覚農は宗教的慈善運動家のなかに仏教関係者を入れ、また女権運動家の代表として与謝野晶子をあげている。奚明は当時の中国において「女権」のなかで最も注目されていた参政権獲得運動<sup>20</sup>をひとつの流れとしたが、呉覚農の挙げた「女権」とは参政権だけでなく女性の「人」としての権利を意味した。中国と日本の女性運動の進展度に差異があるため、同列に並べて比較できないが、両人の女性運動全般への認識の違いがここに表れているといえるだろう。

奚明の女性運動を分類する上での根本的な考えは、次の文中から知ることができる。

「あらゆる生物にはすべて2種類の主要な本能がある。ひとつは食の本能、もうひとつは性の本能である。前者は個体の生存を維持することであり、後者は種族の存続を維持することにある。人類も生物のひとつであるため、当然この2種類の基本的な本能を有している。しかし人類は別の生物と比べるとさらに進化している。そのためこの2つの本能を満足させる手段や方式は、他の生物よりずっと複雑である。

あらゆる社会の制度、風俗、習慣、道徳、宗教哲学、科学、芸術にいたるまですべてこの2つの基点から発生した。従来の社会は「男主女従」の社会で、男子は女子を性の本能を満足させる道具としたが、女子の性の本能をすべて蔑視した。

婦女運動の本旨はこのような不合理な社会を改革して、婦女にも性の本能を十分に自由に満足させ、その性の使命を全うさせ、男子や児童と共同で全種族の文化を發展させることができる。」（「婦女運動の四大潮流」）

このように奚明は、「食の本能」と「性の本能」を人間社会の基点とし、それぞれを個体の生存と種族の存続を維持するために意義付けする。「性の本能」を人間社会の1つの基点として、奚明にジェンダー的認識をもたせている。したがって女性運動に対する分析や分類は、この「食の本能」と「性の本能」を主軸とする。

そこから次に奚明は、「キリスト教の婦女運動」と「社会主義の婦女運動」は婦女運動ではない、「性の認識」からは「婦女参政運動」と「母権運動」が婦女運動である、という。彼のいう「性の認識」とは現在のジェンダー認識に相当するであろう。



これに対して呉覚農は次のようにいう<sup>21</sup>。

「第1の婦女運動はほとんどキリスト教徒が行っているが、婦人の性の解放に対して少しも関係を生じていない。奚明先生だけでなく記者もこれに反対。しかし第4階級の婦女運動は、性の問題に対して十分には注意していないが、次のように断言できる。どのような社会であろうと、もし食の問題が解決されない前に、性の問題の解決を求めようとすることは、行動が目的と一致していないといえる。……

しかし現在の世界の青年男女で経済に圧迫されて結婚を実行できない人が幾千万いるか知れない。経済の関係で生涯独身の人が幾千万いるか知れない。恩愛の夫婦が経済の影響を受けて、路頭に迷っている人がこれまた幾千万いるか知れない。ゆえに経済問題が解決されない前には決して真実の性の問題を語ることはできないのである。たとえ鼓吹や改革の方法が講じられても、小さな一部分の目的を達したに過ぎない。

社会主義者の言う『経済問題が解決すれば婦女問題もそれにつれて解決される』ということは少し誇張しすぎではあるが、経済問題が解決された後に婦女問題の解決は十中八九得られる。即ち性の問題もここから解決される希望に到達する。」

このように呉覚農は食の問題即ち経済の解決を図ることが、すべての問題に先行されなければならないことを主張した。そして具体的に4種類の女性運動にそれぞれのように前提となるか説明する。

奚明は「キリスト教の婦女運動」は、慈善博愛の気持ちから出ていて、性の認識は余り明らかでないことを指摘するが、これに対して呉覚農は同じ宗教者である回教徒による婦女運動がトルコで展開され、多妻主義、「重男軽女（男尊女卑）」の因習的な制度習慣が撤廃消滅されようとしていることを説明する<sup>22</sup>。この「回教国トルコの婦女運動」について、呉覚農は山川家を直接訪問して菊栄・均夫妻と話をした時に、菊栄の『女性改造』の論文をもらっている<sup>23</sup>ため、菊栄の文章から知ったと思われる。

第四階級の女性による「社会主義婦女運動」について、奚明は、「欧米では非常に盛んで、ロシアではすでに実行している。しかし中国にはまだ入っておらず、小部分の女子がこの思想を持っているだけだ」と述べるに留まっている。

また4番目の「母権運動」については、「哲学的、生物学的、人類学的、社会学的根拠から出発し、婦人のもっとも重大な責任は、未来の人類を創造することにある

と考える。……それ故婦女は人の自由を持つべきで、特に女性の自由を持つべきことを主張する。いわゆる女性の自由とは恋愛の選択と母性の自由、子女を生み育てる自由、母性の幸福を享樂する自由である。」という。

それに対して呉覺農は、母権運動は女性運動の中で「是非とも必要な」運動である。「人類社会の一方面では固より『個人の發展』を図るべきであり、多方面では『種族の進化』に特に注意しなければならない。男女両性に強弱優劣があるという旧説に反対だが、男女の生理上や心理上に相異なる組織があることは認めないわけにはいかない」と述べている<sup>24</sup>。

呉覺農は「現代の最も権威ある婦女主義者」で「力を極めて母性尊重を主張する一人」として、エレン・ケイを捉えている。そしてエレン・ケイの考える母権運動は「現代社会のなかでは、ひとつの理論に過ぎず、決して即時には実現されない」という<sup>25</sup>。さらに山川菊栄と長時間討論したときに、彼女が「エレン・ケイの思想は社会主義が実現する以前には空論に近くなる」といったことを引く。そして「第四階級の婦女運動が、婦女を解放する。『人』の問題の道は、第4の即ち母権運動に到達する道である」といって、自分と奚明との根本的な違いがここにあるという<sup>26</sup>。

奚明の方はそれに対して誤解があるとして、「YD先生に答える」<sup>27</sup>の冒頭で次のように弁明する。自分は「第四階級の婦女運動に反対ではない。それだけではなく婦女問題を解決するには、まず第四階級の婦女の覚悟を促さなければならない」と。しかし第四階級の婦女運動は「もっぱら経済組織を改革して貧富階級を除去することを主旨とする。その運動の対象は両性の不平等から貧富階級の不平等に移り、性の差別に対しては注意が不十分である。それゆえ婦女運動というより、社会主義運動あるいは経済革命事業というほうが妥当である。」と述べる。

さらに「運動に従事するのが婦女であるから、この運動によって婦女問題の一部分を解決できるだろう。しかし、それでは第四階級の婦女運動というより、第四階級の運動というほうが妥当だ。この運動の手段や目標は、第四階級の男子運動と区別がない。しかも全第四階級一男女を分かつが力を出して協力する婦女の運動ではなく、婦女による運動でもない。」と述べて、第四階級といわれる労働者階級の女性による社会主義の婦女運動は、女性のための運動でないことを指摘する<sup>28</sup>。

そして次の点を強調している。

「……経済問題は食の本能から発生するものであり、婦女問題は性の本能から発生するものである。」

一方、呉覚農は「わが国の婦女運動の進展方向はもとよりいろいろあるが、決して空想的、遊戯的、個人的、享樂的な婦女運動にしてはならない。しかも下層階級の苦難を受けている諸姉妹たちを忘れずに、目標を定めて的確に行わなければならない」といって、女性運動に第四階級である「下層階級の諸姉妹」を組みこまなければならないことを強調する<sup>29</sup>。

呉覚農のこのような考えには、山川菊栄の女性運動論の影響が顕著にみえる。彼女は「無産階級の婦人運動」<sup>30</sup>の中で、次のように述べている。

中流階級の女権運動は「資本主義の発展によって、一方家事と育児の負担を軽減せられ、他方自活の必要に迫られた中流婦人の、教育、職業、及び参政権に対する機会均等の要求であった。……けれど女権運動は……母性に伴う女性特有の義務と権利を没却して居った。女権論者は、婦人を資本主義的競争の巷に遂うに急であった。人類の母としての使命を全うするに適した環境を作り出す問題を忘れていた。……かくて女権運動の成功は、中流婦人に教育や職業の門戸開放をもたらしたに留まり、無産婦人一母として、また賃金労働者として一の大衆にもっとも痛切な、最も重大な影響のある婦人労働の問題には触れ得なかった。」

しかし「婦人運動の焦点」が「ブルジョアの手からプロレタリアの手に移る」と、「婦人問題の中心は参政の問題ではなくて、婦人労働及び母性保護の問題に移った。……プロレタリアの婦人運動は、生産者として、同時に母としての婦人の解放に終始する。前者が対男子の運動であったに引き換え、これは対資本家階級の運動である。」

奚明はY D（呉覚農）の反論に対する弁明の最後で次のように結ぶ。

「Y D先生は、経済問題が解決すれば婦女問題も解決するという話は誇張しすぎると認めており、また第四階級の婦女運動は母権運動に到達する道であるといっている。これらはすべて私と一致する。Y D先生は第2点目を私と根本的に異なるところとしているが、これはY D先生が私を誤解しているところだと思う。」（「Y D先生に答える」『現代婦女』第12期 1922年12月26日）

奚明は呉覺農との応答で誤解を除けば、意見は一致していることを確認し、特に一致点として母権運動を挙げている。

奚明は最初の「婦女運動の四大潮流」の語調に比べると1と3の婦女運動に対する分析が柔軟になっているが、その論理的根拠が変わったわけではない。食と性の二元思考である。それに対して呉覺農は、食すなわち経済問題がすべての問題に先行すると明確に対峙する。

#### 四.

当時の中国の女性運動をどのように分類するかについて、奚明や呉覺農以外の諸説も多く目に付くが、そのなかで女性問題を多く論じている瑟廬は「わが国の婦女運動は英米の女権運動に属すること疑いなし」といい、次のように中国における女権運動を説明する。

「女権運動は、婦女運動が初歩である中国では母権運動に比べれば適切である。…女子が隷属的な状態にあり、その個性を発揮できないために、いわゆる「人の自由」を要求しないわけにはいかない。しかしこの人の自由の獲得は婦女運動が必ず経なければならない道ではあるが、決して婦女運動の終極の目的とすることはできない。婦女運動の終極の目的は「女性の自由」の獲得でなければならない。それゆえわが国の現在の婦女運動は女権運動から入らねばならないが、最も根本的な目的とするかどうかについては、深く考えなければならないところである。」（「婦女運動の新傾向」<sup>31</sup>）

と述べている。瑟廬のいう「女権運動」とは「女性」が自由になるための要求運動である。具体的には憲法での女権の保障、財産権の獲得、平等な教育制度、男女平等の婚姻法、公娼禁止や婢女売買の禁止、纏足の禁止などが挙げられている。奚明の挙げた婦女参政運動は、瑟廬のいう「男子と同等の自由を要求する女権運動」の一部分にすぎない。

喬峯<sup>32</sup>は「婦女運動はもとより各方面で、しかも同時に並行して行うべきだが、その中心的な努力は便宜上参政権獲得を先行すべきである。」「女性の参政権獲得は、一面では、女性の地位を高め、……また参政権を持った以後は多くの婦女問題の事柄も容易に力となるところがある。」「中国の婦女運動が参政権要求から手をつけることは間違っていない。」それは「対象がはっきりし、標語も簡単で容易に人を軌道

に引き入れやすい。対象がはっきりすれば、行いも一致しやすい」からだ、という。

そして過去10余年の中国の婦女運動について次のように述べる。

「私は10余年来、婦女運動といえる事柄は実はきわめて少ないと思う。以前愛国運動をした婦女がいたし、革命事業で命を落とした婦女もいたが、厳密に言うとはそれは決して婦女運動ではなく、女子決死隊や北伐隊とかの類は一時の感情的な衝動的行為だけで、女権拡張のために出発したものではない。」<sup>33</sup>

参政権要求運動を女性運動の第1におくべきだとする喬峯の考えは、奚明とは異なるが、政治運動や民族解放運動に女性が参加することは、女性運動ではないという点は同じである。したがって、それらの民族的政治的課題が食の問題（経済）に直結しなければ、呉覚農のいう第四階級の女性が先導する運動とはならない。

向警予は「中国の最近の婦女運動は労働婦女運動、女権運動及び参政運動、基督教婦女運動の三派に分けられる」という<sup>34</sup>。労働婦女運動については、1922年に紡織や製糸、タバコ等の工場で女性労働者が賃金引上げや待遇改善などを要求したストライキが激増したことから、向警予は「勇敢で、組織があり、戦える新興の婦女労働軍は、婦女解放の先鋒であるだけでなく、…… 国民革命の前衛でもある」と新たに位置づける。女権や参政運動は女性知識人が議員になることや1000人にも満たない人たちが請願やお願い式の要求活動を行っているに過ぎない。キリスト教の女性たちの運動は「外国資本の機械となる恐れがあり、中国国民運動の中で必要とする運動ではない」と断定する。

## 五.

呉覚農は私的空間の中では、兄嫁の上海での過酷な女工生活から労働女性や女性運動に関心をもった<sup>35</sup>のであるが、中国女性運動史から見ると、1920年代の初めは、女性運動が停滞した時期であった。しかも中国の女性運動がどのような方向に舵を取るか、まだ模索中の時期でもあった。別の言い方をすれば、女性運動として何種類かの道が可能と考えられていた。しかし、1922年に中国共産党、1926年には国民党婦女部の方針によって、女性運動が国民革命に組み込まれる。

後に向警予が喬峯と同じ『婦女雑誌』の号の「今後の中国婦女の国民革命運動」

のなかで、「中国の婦女運動はすでに国民革命運動の特性をもっている。……今後10年内の中国婦女運動は決まりきった18世紀の欧米の女権運動の古い方式を学ぶのではなく、全局を洞察し、機先を制して、国民革命運動の先駆となり、女権の道を開くべきである。」と主張した。

このようにして奚明のいう「第四階級の労働婦女が多数の社会主義婦女運動」、吳覺農のいう労働階級の婦女運動が主流となっていく。少なくとも中国の女性運動史では最も重要視される系統となったのである。しかし他の系統が途絶えたのではなく、各分野において女性たちの運動はそれぞれに展開されていた。女性運動史がどのような視点で構築されるかによって他の流れも「歴史の地表に浮かび出る」ことができるだろう。

## 六.

前述のように、吳覺農は日本留学を契機に日本の刊行物から多くの女性問題に関する文章を訳出している。当時の日本の女性運動に言及した女性雑誌などについて概観し、中国の女性刊行物との関連を見てみたい。吳覺農が日本側の関連著述を読むうえで、後に結婚することになった陳宣昭の存在を特記しなければならないだろう。彼女は当時難関であった東京高等蚕糸学校に入学し、製糸教婦養成科で1923年から25年の2年間に在籍し卒業（2年制）した<sup>36</sup>。

明治も後半期になると日本の雑誌界は、「大別して、結社の主張に立つ言論雑誌、実業界に情報を提供する実業雑誌、女性に対する啓蒙を目的とする女性雑誌、学生の勉強向けや少年向けの雑誌、そして文芸雑誌などが刊行されていた。言論雑誌は民友社の機関誌『国民之友』（1887創刊）と三宅雪嶺主宰の『日本人』（1888創刊、明治40年に『日本及日本人』と改題）との二誌がリードしていた。<sup>37</sup>『国民之友』は政治・経済・教育の諸分野だけでなく、文芸欄や海外の思想動向欄、評論欄など多彩な内容で、販売部数は各号1万2千以上であった。それに触発された博文館は1895年に総合雑誌として『太陽』を創刊し、「日本という国民国家における各分野の最高水準を一覧できるようにし、かつ、それを平易で一般的に展開しなければならない」とした。『太陽』は第2巻（1896年）から「家庭」欄（第4巻からは「家庭及叢談」）を設け、巖本善治が担当していたが、明治34年1月には『女学世界』（～1925年6月）を別個に創刊する。『太陽』はその後「国民之教養常識の素材を提供する」「国民

のための公器」を目指し、女子問題に関しても企画している。

呉覚農の日本留学前後には、『太陽』（プラトン社）、『中央公論』（中央公論社）そして創刊間もない『改造』（改造社）が総合雑誌として日本の新しい思想界を牽引していた。同時に時代の要請の下で、それらの総合雑誌はすでに女性特集号を組んでいる。『太陽』は1913年6月（19：9）に「近時之婦人問題」特集、『中央公論』は1913年7月（28：9）臨時増刊に「婦人問題号」、『改造』は1922年7月号に特集「婦人運動の新傾向」を組んだ。各女性特集号は好評で売り上げを伸ばし、さらにこれも新しい時代の流れのなかで、それぞれの総合雑誌発行の出版社は競うように女性版を創刊した。『中央公論』は1916年1月に『婦人公論』を出し、知的な女性向けにさまざまな問題や話題を取り上げ、長い生命を保って、現在にまで至っている。プラトン社は1922年5月に『女性』を出した。「“日本モダニズム”の風潮を色濃く反映している」雑誌で、「欧米発の近代的な生活合理主義や風俗の解放の動きを、『女性』はいち早くとり入れ紹介した。<sup>38</sup>」『改造』は同年10月に『女性改造』を創刊して、女性の解放を目指す左派的な言論活動を展開していった。

新しい国家、社会から家族像や人間関係に至る「中国の将来」を模索していた中国人留学生にとって、これらの雑誌は彼らの知識欲や思索の糧となっただけでなく、母国の新聞雑誌に投稿する翻訳の材料という経済的糧ともなったのであった。

呉覚農の訳出した原著は、後掲の「一覧」をみると、『婦人公論』『女性改造』などに掲載されたものだとわかるが、次に『婦女雑誌』第9巻第1号「婦女運動」特集号（1923年1月1日）のなかから、日本の女性雑誌などからの翻訳及び日本の女性問題関連の著述を挙げてみると、以下のようになる。

1. 「婦女運動」特集号と日本関連の訳者・執筆者（「原著題名」『原著掲載誌』）  
尚一訳・本間久雄（「婦女運動の根底にある2つの主張」掲載誌不明）  
無競訳・千葉亀雄「女権発達史話」（「女権発達史」『婦人公論』1922年2月号）  
祁森煥訳・山川菊栄「無産階級的婦女運動」（「無産階級の婦人運動」『女性改造』創刊号、1922年10月号）  
祁森煥「日本婦女運動的過去和現在（文化運動、政治運動、社会運動の主張）」  
Y. D. 「日本婦女團體及婦女運動者訪問記」
2. 日本女性運動以外の日本語からの訳述  
雲鶴訳・英国羅素夫人「中國的女權主義及女性改造運動」（ドナ・ラッセル「支

- 那に於ける中国の女権主義と女性改造運動」(『女性改造』創刊号)  
呉覺農, L. T. 訳・吉田静致「欧米婦女運動近況」(掲載誌不明)  
易閑・山川菊栄「回教國的婦女運動」(「回教国の婦人問題」『女性改造』1:2,  
1922年11月号)  
施存統訳・厨川白村「憶伏爾斯頓克拉夫脫女士」(「黎明期の第一声—ゴドキン  
夫人ウオルストンクラフトを憶う」『女性改造』1:2)  
Y. D. 「西維亞班霍斯德女士自敘傳」(シルヴィア・パンクハースト「婦人参政  
より共產主義へ」『改造』3:12, 1921年11月号)

『婦女雑誌』全体からみると、日本の『婦人公論』や『主婦の友』などからの翻訳が多く掲載されているが、「婦女運動」特集号は日本の『女性改造』が創刊された翌年という時間的緊密性と、『女性改造』のもつ革新性が、当時の『婦女雑誌』の編集部の周辺にいた青年たちを惹きつけた。と同時に前年の1922年には上海などの女性労働者によるストライキ運動が激増したことが最大の要因と考えなければならないだろう。

また女性雑誌ではないが、前年の『東方雑誌』第19巻18号(1922年9月)には雑評欄に喬峰(前出、周建人の筆名)「對於女権運動的希望(女権運動に対する希望)」, 女権運動欄に尚一(胡愈之の筆名)「近代婦女運動發生的途徑」, 化魯(胡愈之の筆名)「婦女参政運動的過去及現在」, 健孟(周建人の筆名)「女権運動的根本要素」, 高山(周建人の筆名)「中國的女権運動」が掲載されている。

これらの資料から1922年から23年にかけて、青年知識人が中国の女性運動の方向性について、関心を寄せていたことがわかる。また五で述べたように1922年7月に中国共産党の女性運動に関する決議が出され、更に26年1月には中国国民党の「女性運動決議案」が採択されるが、この二大政党が国民革命に女性を取りこんでいく中で、実際の女性運動の方向性と内容はどのような影響を受けていったか、女権運動や母権運動が、中国人のジェンダー認識にどのように反映継承されていったか、新たな課題となるであろう。

付録1 呉覺農の著述・訳述関連一覧表

付録2 日本と中国の女性定期刊行物創刊年表 [1885年～1926年]



## 注

- 1) 王旭烽《茶者圣—吴觉农传》p. 159～166
- 2) 拙稿『中国女性史研究』第17号（2008年2月）pp. 64-88
- 3) 王旭烽（2003）
- 4) 夏衍著，阿部幸夫訳（1989）p. 20。 陈坚，张艳梅《世纪行吟—夏衍传》（2005）p. 53  
でも「呉覚農や章錫琛は婦女運動の積極分子で開明書店でも『新女性』という雑誌を出版していたため，夏衍も無意識のうちに婦女問題に関心をもち始め，早期のマルクス主義者ベーベルの『婦女と社会主義』を中国語に訳した」とある。夏衍が呉覚農と知り合ったのは，それぞれの妻となった二人の女性（蔡淑馨と陳宣昭は杭州省立蚕桑女子学校，さらに省立女子師範学校での同級生。蔡は1925年8月に奈良に行き，9月から奈良女子高等師範学校に入学，陳は東京の蚕業養成学校に入学）を介してであった。夏衍は1920-1927明治大学専門学校及び九州大学に留学。その時期は帰国後の呉覚農も生計維持のために盛んに翻訳・文筆活動をしていた。しかし一方では農学研究会を発足するなど専門分野での活躍もしていた。
- 5) 呉覚農のペンネームについては，拙稿「Y. D. とは誰か—日本の女性問題を紹介・論評した呉覚農について」で詳述した。参照されたい。  
『恋愛 婚姻 女権 陳望道婦女問題論集』（編集責任張煉，2010年）では，Y. D. は陳望道のペンネームとして各訳著述を収録しているが，その根拠とするところは記載されていないため，不明。呉覚農と陳望道は日本留学経験や執筆分野など共通するものが多い。
- 6) 黒岩比佐子（2010）pp. 215-217
- 7) 前山加奈子（1995）pp. 117-118
- 8) （1912. 4～1941 復刊1944. 7～1951. 2）キリスト教の一宗派である広学会の刊行物で，樂亮月，李冠芳，劉美麗が編集を担当した。
- 9) （1922～1931）上海の中華婦女節制協会の刊行物，発行・編集責任者は劉王立明。
- 10) （1922～1937）上海基督教女青年会（YWCA）の刊行物。
- 11) （1923～1936）江蘇省呉県の女子蚕業学校校友会の出版物。
- 12) これらの人物を中心として，以後開明書店の設立と経営に引き継がれていく。
- 13) 李達は1913-1918東京帝国大学留学，陳望道は1915-1919早稲田大学法学部留学，夏丐尊は1905-1907東京高等工業学校留学，章錫琛・沈雁冰・周建人は日本語を習得，任白濤は1916-1921留学。
- 14) 西槇偉「一九二〇年代中国における恋愛観の受容と日本—『婦女雑誌』を中心

- に」東大比較文学会『比較文学研究』第64号，1993年12月。
- 15) 『東方雑誌』掲載には次の著述がある。Y. D. 「八時間労働制的沿革史」18巻23号(1921年2月)，吳覚農「中国的農民問題」19巻16号（農業及農民運動号）(1922年8月)，吳覚農「日本農民運動中の趨勢」19巻16号（農業及農民運動号）(1922年8月)。
- 16) 王旭烽『茶者圣—吳覚農傳』p. 35
- 17) 奚明：本名不明。『新女性』に文章を掲載しているところから中国婦女問題研究会のメンバー或いはその周囲にいる人物と思われる。(『新女性』には創刊号に「女界前途之大問題」，1：4に「讚美李昭實女士」，1：5に「礼教吃人了」がある。)
- 18) 吳覚農が吳慧芳の名で初めて女性運動に関して訳述したものは、『婦女声』に掲載されたが，現在のところ未見。
- 『現代婦女』については，拙稿（2006）を参照されたい。
- 19) 「日本婦女団体及婦女運動者訪問記」『婦女雑誌』9：1
- 20) 五四運動以後，北京女子参政協進会と女権運動同盟会が組織され，活動を始めた。
- 21) 「論第四階級的婦女運動質奚明先生（第四階級の婦女運動を論じ，奚明先生に訊ねる）」『現代婦女』第10期（1922年12月6日）
- 22) 山川の「回教国の婦人運動」は『女性改造』1：2（1922年11月1日）に掲載。吳覚農は同誌1：1掲載のドラ・ラッセルの「支那に於ける女権主義と女性改造運動」を翻訳し，『現代婦女』の発表していること等から当該号を読んだことが推測できる。『婦女雑誌』9：1には訳文掲載。「回教国の婦人運動」には，「極端な男性中心の宗教的信仰に煩わされ」奴隷や囚人のように扱われてきた回教民族の女性は，「男子は民族的自由，宗教的自由を要求して起つ時」，家族制度よりの解放という目標と経済的独立の機会を得たこと，また「回教民族の自覚に重大な刺激を及ぼしたものはロシア革命で」，「革命の当初から…婦人解放を目標とする回教婦人団体が族生した。……十一月革命は，更に一層回教婦人の目覚しい活動をうながした」とある。(pp. 74-80)
- 23) 「日本婦女団体及婦女運動者訪問記」『婦女雑誌』9：1，pp. 244-246
- 24) 吳覚農「愛倫凱の母権運動」『婦女雑誌』9-1，p. 74
- 25) 先述した瑟廬は「われわれが今日婦女運動に従事するには，女権運動を手段として，母権運動を目的とするべきだ」（「婦女運動の新傾向」p. 7）という。彼のいう女権運動は「男子と同等の自由を要求する運動」で，「女子は男子と同様の能

- 力を有している。それ故男子より卑劣な待遇を受けるべきではない」、また母権運動とは「女性独特の自由を要求する運動」で、「女子は男子と同様の能力を有しているだけでなく女子特有の能力を有している。そのため男子に劣らない待遇を受け、男子と異なる待遇を受けるべきである」を指す。(同上, p. 2)
- 26) 「論第四階級の婦女運動質奚明先生」『現代婦女』第10期 (1922年12月6日)  
吳覺農は山川菊栄からの影響を受けているが、彼女の「第四階級の婦人運動」を読んだかどうかは明らかでない。しかし少なくともその内容は直接聞いて知っていたと思われる。
- 27) 「答Y D先生」『現代婦女』第12期 (1922年12月26日)
- 28) 陳望道は異なった階級の女性運動の性格 (特質) について次のように指摘している。「第三階級の女性運動の目標は、『女であるがゆえに』被ったさまざまな不公平や不合理を取り除くことにある。したがって第三階級の女性運動は、女性の男性に対する人権運動であり、第四階級の女性運動は、労働者の資本家に対する経済運動である。」(『中国女性運動史1919-49』p. 107, 初出は「我想 (二)」『新婦女』4:4 (1920年11月15日) 未見) 奚明の説と相通じるものがある。奚明は陳の筆名か否か不明。
- 29) 26) と同じ。女性運動と第四階級に関して、王劍虹が比較的早く「女権運動の中心は第四階級へ移行しなければならない」の中で、マルクス主義による女性運動の方向性を打ち出している。(『婦女声』第1期, 1921年12月)
- 30) 『女性改造』創刊号掲載 (1922年10月)
- 31) 瑟廬「婦女運動的新傾向」『婦女雜誌』9:1 (1923年1月1日) p. 3
- 32) 喬峯: 本名は周建人 (1888-1984) 浙江省紹興出身, 五四時期に北京大学で学び, 1921年から上海の商務印書館で編集に従事する。『東方雜誌』『婦女雜誌』『自然』を編集。同時に上海大学や神州女子学校等で教鞭をとる。上海文化界反帝抗日同盟, 中国民権保障同盟に参加。魯迅の末弟。
- 33) 喬峯「婦女運動的過去及将来應取的方針」『婦女雜誌』10:1「十年記念号」(1924年1月1日) pp. 22-28
- 34) 向警予「中国最近婦女運動」『前鋒』第1期 (1923年7月1日)『中国婦女運動歴史資料 (1921-1927)』pp. 86-93所収
- 35) 拙稿「Y. D. とは誰か—日本の女性問題を紹介・論評した吳覺農について」『中国女性史研究』第17号, pp. 72-73参照のこと。
- 36) 周一川[2000]pp. 162~169

37) 鈴木貞美編 (2001) p. 12

38) 「雑誌『女性』と中山太陽堂およびプラトン社について」『雑誌『女性』第48巻』  
日本図書センター, 1993年9月 p. 7

## 参考文献

### 1) 中国語文献

陈坚, 张艳梅《世纪行吟—夏衍传》浙江人民出版社, 2005年

李晓红《女性的声音—民国时期上海知识女性与大众传媒》学林出版社, 2008年

羅秀美《從秋瑾到蔡珠兒—近現代知識女性的文學表現》台灣學生書局, 2010年

宋素红《女性媒介: 历史与传统》中国传媒大学出版社, 2006年

王旭烽《茶者圣—吴觉农传》浙江人民出版社, 2003年

责任编辑张炼《恋爱 婚姻 女权 陈望道妇女问题论集》复旦大学出版社, 2010年

中华全国妇女联合会妇女运动历史研究室《中国妇女运动历史资料 1921-1927》人民出版社, 1986年

周葱秀, 涂明《中国近现代文化期刊史》山西教育出版社, 1999年

### 2) 日本語文献

嶋中鵬二編『中央公論社七十年史』中央公論社, 昭和30年

中国女性史研究会編訳『中国女性運動史 1919-49』論創社, 1995年

中国女性史研究会編『中国女性の100年 資料にみる歩み』青木書店, 2004年

浜口廣『女性誌の源流—女の雑誌, かく生まれ, かく競い, かく死せり—』出版  
ニュース社, 2004年

『婦人公論の五十年』中央公論社, 昭和40年

池田恵美子編著『出版女性史—出版ジャーナリズムに生きる女性たち』世界思想  
社, 2001年

夏衍著, 阿部幸夫訳『上海に燃ゆ 夏衍自伝』東方書店, 1989年

近代女性文化史研究会『大正期の女性雑誌』大空社, 1996年

久保加津代『女性雑誌に住まいづくりを学ぶ —大正デモクラシー期を中心に』  
ドメス出版, 2002年

黒岩比佐子『パンとペン 社会主義者・堺利彦と「売文社」の闘い』講談社, 2010  
年

前山加奈子「中国の女性向け定期刊行物について—その内容と特徴—」『駿河台大

- 学論叢』第10号，1995年，pp. 115-145
- 前山加奈子「女性定期刊行物全体からみた『婦女雑誌』—近現代中国のジェンダー文化を考えるの一助として」村田雄二郎編『『婦女雑誌』からみる近代中国女性』研文出版，2005年，pp. 365-403
- 前山加奈子「婦女問題研究会と『現代婦女』（『時事新報』副刊）—中国の1920年代初期における「節育」観—」『駿河台大学論叢』第32号，2006年，pp. 171-194
- 三井礼子『現代婦人運動史年表』三一書房，1963年
- 村田雄二郎編『『婦女雑誌』からみる近代中国女性』研文出版，2005年
- 村田雄二郎編『『婦女雑誌』総目録・索引』東京大学『婦女雑誌』研究会，2006年
- 『「日本の婦人雑誌」解説編』大空社，1994年
- 「女と男の時空」編纂委員会編『女と男の時空—日本女性史再考 別巻 年表・女と男の日本史』藤原書店，1998年
- 関忠果・小林英三郎・松浦總三・大悟法進編著『雑誌『改造』の四十年—付・改造目次総覧』光和堂，1977年
- 鈴木貞美編『雑誌「太陽」と国民文化の形成』思文閣，2001年
- 周一川『中国人女性の日本留学史研究』図書刊行会，2000年
- 『実業之日本社百年史』実業之日本社，平成9年

## 付録1 吳覺農の著述・訳述関連一覧表

	題名または書名	発表名	掲載雑誌／新聞名	発表年月日	備考(原著名、掲載書等)
1	蜜蜂飼養法	上虞吳覺農	《婦女雜誌》第一卷11號	1915年11月	学芸欄
2	牡丹栽培法	覺農	《婦女雜誌》第四卷12號	1918年12月	家政欄
3	日本婦女状況	YD	《婦女雜誌》第七卷1號 pp. 13-15	1921年7月1日	山川菊栄『婦人の勝利』「第4章 近代婦人運動 1.1 日本」日本評論社、1919年6月、p. 193-200
4	優生學和美國婚姻法	YD	《婦女雜誌》第七卷1號 pp. 21-27	1921年7月1日	
5	谷本武氏の婚姻問題觀	Y. D.	《婦女雜誌》第七卷9號 pp. 16-20	1921年9月1日	
6	一個自殺的日本女青年	Y. D.	《婦女雜誌》第七卷10號 pp. 29-31	1921年10月1日	
7	職業與婦女	Y. D.	《婦女雜誌》第七卷11號 pp. 8-11	1921年11月1日	『民国叢書』所収
8	通信 日本女性の抬頭	Y. D.	《婦女評論》第14期	1921年11月2日	
9	婦女問題與勞動問題的共同點 大山郁夫講演 王希天通譯	Y. D.	《婦女雜誌》第七卷12號 pp. 8-10	1921年12月1日	
10	勞動婦女底解放 山川菊栄著	Y. D. 訳	《婦女評論》第21期	1921年12月21日	「労働婦人の解放」リフレット『労働婦人の解放=女工問題』所収、無産社、1921年9月30日(鈴木裕子編・解説『日本女性運動資料集成』第1巻、不二出版、1996年5月 所収)、『民国叢書』所収
11	日本家族制度的破壊 日本生田長江著	Y. D. 訳	《婦女雜誌》第八卷1號 pp. 23-24	1922年1月	
12	婦女的精神生活 日本富士川游〔原著〕	Y. D. 〔訳〕	《婦女雜誌》第八卷1號 pp. 63-69	1922年1月	? 「身体上より見たる女子解放問題」『改造』2: 4 (大9 (1920年)・4月) 『民国叢書』所収
13	近代的戀愛觀 日本廣川白村原著	Y. D. 〔訳〕	《婦女雜誌》第八卷2號 pp. 7-12	1922年2月	「近代の戀愛觀 (六を除き一〜八)」『東京朝日新聞』1921年9月30日〜同年10月6日、12日〜14日
14	婦女勞動運動	吳慧芳 譯	《婦女聲》第5期	1922年2月10日	本名: 吳覺農
15	〔離婚の兩大学説〕愛倫凱的自由離婚論	吳覺農	《婦女雜誌》第八卷4號(離婚問題號) pp. 51-57	1922年4月	英訳本より、Love and Marriage(“Lif's Linjer生命線”の前半)第8章自由離婚
16	白蓮女士離婚記	Y. D.	《婦女雜誌》第八卷4號(離婚問題號) pp. 138-142	1922年4月	
17	一件妥協の離婚	Y. D.	《婦女雜誌》第八卷4號(離婚問題號) pp. 162-165	1922年4月	
17b	結婚與離婚 節訳日本生田長江著	庸棠	《婦女雜誌》第八卷4號(離婚問題號)	1922年4月	

1920年代初頭における日本と中国の女性定期刊行物  
— 刈覚農が紹介・論争した女性運動論からみる —

18	告失戀的人門 日本賀川豊彦著	Y. D. [訳]	《婦女雜誌》第八卷5號 pp. 27-30	1922年5月	『主婦之友』大正11 (1922) 年1月15日号 p. 20-26
19	松孩 俄国愛羅先珂作	吳覺農 [訳]	《婦女雜誌》第八卷7號 pp. 93-98	1922年7月	「松之子」エロシェンコ創作集『夜あけ前の歌』義文閣、大10年 (1921) 7月所収 [『改造』3: 12 (大10. 11月) 新刊紹介]
20	兒童保障案	覺農	《婦女雜誌》第八卷9號 pp. 44-45	1922年9月	評壇欄
21	「恋愛と結婚」戀愛之力 日本賀川豊彦著	Y. D. [訳]	《婦女雜誌》第八卷9號 pp. 59-64	1922年9月	『主婦之友』大正11 (1922) 年7月号p. 10-17
22	戀愛的移動性與一夫一婦制的改造 日本本間久雄原著	Y. D. [訳]	《婦女雜誌》第八卷9號 pp. 65-67	1922年9月	「恋愛の移動性と一夫一婦制の改造」『改造』4-4 (1922年4月) p. 310~
23	戀愛的自由 愛倫凱女士著	YD譯	《民國日報》副刊〈婦女評論〉第58期	1922年9月13日	エレン・ケイ「恋愛の自由」ちいてう訳『青鞥』4-6~8 (1914年6月1日~8月1日)
25	農村的婦人問題	吳覺農	《時事新報》副刊〈現代婦女〉第2期	1922年9月16日	
24	戀愛的自由 (續五十八期) 愛倫凱女士著	YD譯	《民國日報》副刊〈婦女評論〉第60期	1922年9月27日	エレン・ケイ「恋愛の自由」ちいてう訳『青鞥』4-6~8 (1914年6月1日~8月1日)
26	愛倫凱世界改造與新婦女責任論 日本本間久雄原著	吳覺農 [訳]	《婦女雜誌》第八卷10號 pp. 47-52	1922年10月	
27	告“女性日本人”記者花園女士	Y. D	《時事新報》副刊〈現代婦女〉第8期	1922年11月16日	
→27	中華民國姉妹の御方へ	花園	『女性日本人』3: 11	1922年11月1日	
28	〔貞操問題的討論〕近代的貞操觀	吳覺農	《婦女雜誌》第八卷12號(貞操問題的討論) pp. 5-8	1922年12月	
29	新社會自由人的貞操觀 日本帆足理一郎著	Y. D. [訳]	《婦女雜誌》第八卷12號(貞操問題的討論) pp. 20-23	1922年12月	
30	論寡婦再嫁 日本宮本英雄著	Y. D. [訳]	《婦女雜誌》第八卷12號(貞操問題的討論) pp. 45-49	1922年12月	
31	開花的老人 (童話劇) 日本武者小路實篤作	Y. D. 、翰周	《婦女雜誌》第八卷12號(貞操問題的討論) pp. 111-122	1922年12月	「法律道德の欠陥のみ」『女性改造』1-2 (1922年11月1日) p. 35-41
←32	婦女運動的四大潮流	奚明	《時事新報》副刊〈現代婦女〉第9期	1922年11月	
32	論第四階級的婦女運動質奚明先生	Y. D.	《時事新報》副刊〈現代婦女〉第10期	1922年12月6日	
→32	答Y. D. 先生	奚明	《時事新報》副刊〈現代婦女〉第12期	1922年12月26日	
33	愛倫凱的母權運動論	吳覺農	《婦女雜誌》第九卷1號(婦女運動) pp. 74-79	1923年1月1日	

34	日本婦女團體及婦女運動者訪問記(附圖三)	Y. D.	《婦女雜誌》第九卷1號(婦女運動) pp. 240-247	1923年1月1日	1923年1月1日	シルヴィア・パンタハースト「婦人參政より 共産主義へ」『改造』3:12(1921年11月) p. 67~[未確認]
35	西維亞班霍斯德女士自敘傳	Y. D.	《婦女雜誌》第九卷1號(婦女運動) pp. 294-300	1923年1月1日	1923年1月1日	
←36	戀愛自由解答客問第四	鳳子	《婦女雜誌》第九卷2號p. 40-41	1923年2月1日	1923年2月1日	
36	自由戀愛與戀愛自由(読了鳳子女士の「答客問」以後)	Y. D.	《婦女雜誌》第九卷2號 p. 41-43	1923年2月1日	1923年2月1日	
←36	戀愛自由解答編(再答Y. D. 先生并參加王平俊章 鏗深二位先生關於戀愛問題的討論)	鳳子	《婦女雜誌》第九卷2號 p. 44-	1923年2月1日	1923年2月1日	
37	自由戀愛與戀愛自由續編(再答鳳子女士)	Y. D.	《婦女雜誌》第九卷2號 p. 45-48	1923年2月1日	1923年2月1日	
→ 37	讀鳳子女士與Y. D. 先生的討論	章鏗深	《婦女雜誌》第九卷2號 p. 49-	1923年2月1日	1923年2月1日	
38	戀愛與自由 日本廚川白村原著	Y. D. [訳]	《婦女雜誌》第九卷2號pp. 50-52	1923年2月1日	1923年2月1日	「恋愛と自由」『婦人公論』7:9(1922年9月) p. 50-53
39	羅素夫人的中國女權運動觀	Y. D	《時事新報》副刊<現代婦女>第16期	1923年2月6日	1923年2月6日	ドラ・ラッセル「支那に於ける女權主義と女性 改造運動」『女性改造』1-1(1922年10月1日) p. 24-34
c.f.	中國的女權主義及女性改造運動 英國羅素夫人著	雲鶴(譯)	《婦女雜誌》第九卷1號(婦女運動) pp.	1923年1月1日	1923年1月1日	ドラ・ラッセル「支那に於ける女權主義と女性 改造運動」『女性改造』1-1(1922年10月1日) p. 24-36
40	從家庭生活到人類生活 日本秋田雨雀著	Y. D. [訳]	《婦女雜誌》第九卷4號 p. 13-16	1923年4月1日	1923年4月1日	「家庭生活より人類生活へ」『婦人公論』 1923年新年特別号
41	對於鄭振鐸君婚姻史的批評 我的離婚的前後 (兼賀鄭振鐸先生)	Y. D.	《婦女雜誌》第九卷4號 p. 41-43	1923年4月1日	1923年4月1日	
42	從大家庭生活到個人生活	Y. D.	《婦女雜誌》第九卷4號 p. 71-75	1923年4月1日	1923年4月1日	
42a	翻譯預告	T. L. Y. D.	《時事新報》副刊<現代婦女>第22期	1923年4月16日	1923年4月16日	廚川白村著《近代戀愛觀》
42b	通訊 覺農先生	鏗郎	《時事新報》副刊<現代婦女>第28期	1923年6月16日	1923年6月16日	
43	未來社会的婦女 日本佐野学著	詠唐 [訳]	《婦女雜誌》第九卷12號 p. 27-31	1923年12月1日	1923年12月1日	
50	貞操(獨幕劇) 日本菊池寛作	Y. D. 訳	《婦女雜誌》第十卷1號(十年紀念號) pp. 220-223	1924年1月	1924年1月	単行本『貞操』プラトン社、1923年。『日本 戯曲全集46』春陽堂、1928年所収
51	日本小説家の萬葉女士會見記 (南部修太郎原 著)	Y. D. 訳	《婦女雜誌》第十卷3號 pp. 502-508	1924年3月	1924年3月	「万葉女史に会ふの記—支那女子參政權運動 の一片影」『女性改造』3:2(1924年2月1日) p. 63-71



52	家族制度的將來 日本高橋誠一郎著	Y. D. 訳	《婦女雜誌》第十卷7號 pp. 1083-11	1924年7月	「家族制度の將來」『婦人公論』9:3 (1924年3月) p. 31-39
53	戀愛貞操與一夫一婦論 厨川白村著	Y. D. 譯	《民國日報》副刊《婦女週報》第62期	1924年10月29日	「一夫一婦と戀愛」『婦人公論』7:8 (1922年3月) p. 44-
54	社会主義與婦女解放 美国拉派頓特著	詠唐訳	《婦女雜誌》第十卷12号 pp. 1830-1835	1924年12月1日	
55	春(童話劇) 日本竹久夢二作	Y. D. 訳	《婦女雜誌》第十一卷1號(新性道德 號) pp. 272-276	1925年1月	『女性改造』3-1(1924(大正13)年1月1日)文 芸欄 p. 49-58
44	現代女子の苦悶問題 七	覺農	《新女性》第二卷1號 p. 30	1927年1月	
45	通訊 東京情殺事件の續訊	TS YD	《新女性》第二卷1號 p. 131	1927年1月	
46	女子的家庭生活與社會生活 (下田將美著)	Y. D	《新女性》第二卷2號 pp. 165-172	1927年2月	「現代女性生活の過渡期」『女性』10:5 (1926(大正15)年11月号)
47	日本竹内女士會見記	Y. D	《新女性》第二卷3號 pp. 347-352	1927年3月	
48	女性的悲劇 (意大利Gina Lombroso Ferrero羅勃沙著)	陳宣昭	《新女性》第四卷新年號 pp. 77-92	1929年1月	陳宣昭 (郷司ワカ女史の日訳本からの訳出)
49	中國民間的嬰孩殺害 西山榮久著	宣昭 覺農	《新女性》第四卷六月號 pp. 729- 758	1929年6月	共譯

付録2 日本と中国の女性定期刊行物創刊年表[1885年～1926年]

日本の女性新聞雑誌			中国の女性新聞雑誌			
日本の女性雑誌等名	編集・出版関係者	創刊年	創刊年	中国の女性雑誌等名	発行情	編集・出版関係者
女学新誌	修正社	明17年	1884年6月			
女学雑誌	万春社⇒女学雑誌社	明18年	1885年7月			
女学叢誌			1885年12月			
男女勸学新誌	勸学新誌社	明20年	1887年2月			
以良郡女	成美社		1887年7月			
日本之女学	日本女学社⇒博文館		1887年8月			
明治女子職業雑誌	春日軍三郎		1887年8月			
貴女之友	東京教育者		1887年9月			
婦人教会雑誌⇒婦人雑誌	婦人教会（仏教関係）	明21年	1888年2月			
婦人衛生会雑誌⇒婦人衛生雑誌	私立六日本婦人衛生会		1888年2月			
東京婦人矯風雑誌⇒婦人矯風雑誌	東京婦人矯風会機関誌		1888年4月			
婦人教育雑誌	上毛婦人教育会⇒婦人教育雑誌社		1888年5月			
女新聞	主筆坂崎誠		1888年6月			
日本新婦人	新婦人社		1888年9月			
君子と淑女	叻叻社		1888年10月			
文明の母	生文社		1888年10月			
大日本婦人教育会雑誌	大日本婦人教育会		1888年12月			
淑女之苑	成蹊社		1888年12月			
国乃もとみ	興文社	明22年	1889年4月			
美人	美人舎		1889年8月			
婦人世界	令徳会雑誌部		1889年10月			
婦人教育・神州乃芙蓉	淑徳会		1889年12月			
廃娼会雑誌	岐阜県廃娼会	明23年	1890年1月			
つばみ（つば美？）	女文会		1890年1月			
少女園	香雨社		1890年1月			
道之友	名古屋仏教婦人会⇒道之友発行所		1890年3月			
廃娼	廃娼運動機関誌		1890年4月			
女学生	女学雑誌社		1890年5月			
閨秀新誌	硯友社		1890年5月			
心のかが美	聯合婦人会		1890年7月			
婦女子			1890年12月			

1920年代初頭における日本と中国の女性定期刊行物  
— 吳覺農が紹介・論争した女性運動論からみる —

女子教育・操のかかみ	治文書館		1890年12月					
婦女雜誌	博文館	明24年	1891年1月					
花乃園生	仏教花園婦人会→花の園生社→文明社		1891年2月					
家婦のつとめ	吉良堂		1891年3月					
女鑑	国光社→女子新聞社		1891年8月					
女權	女權徳義会機関誌		1891年9月					
日本婦人	同胞社		1891年10月					
婦人雜誌	婦人協会→婦人雜誌社	明25年	1892年4月					
婦人之鏡	相愛社		1892年7月					
家庭雜誌	徳富蘇峰、家庭雜誌社		1892年9月					
をとめ紳	紫紅園		1892年9月					
裏錦	尚絅社		1892年11月					
女子興風雜誌	大日本女子興風会	明26年	1893年1月					
女子雜誌・文学界	女子雜誌社→文学界雜誌社		1893年1月					
御国の母	国母社		1893年1月					
婦人衛生雜誌	私立大日本婦人衛生会		1893年4月					
法の母	婦人正法会		1893年7月					
婦人矯風雜誌→婦人新報	日本婦人矯風会機関誌		1893年11月					
婦人弘道叢記	日本弘道会事務所	明27年	1894年10月					
婦人新報	婦人新報社	明28年	1895年2月					
日本万家庭	日本の家庭社		1895年12月					
婦女之友	婦人会雜誌社→婦女友社	明29年	1896年1月					
むすめの友	大阪平民館本部		1896年7月					
女学草子・なでしこ	進修社		1896年7月					
大倭心	女教社		1896年9月					
女子之友	東洋社→文友社	明30年	1897年6月					
淑女会誌・なよ竹	淑女会		1897年7月					
常盤	常盤社	明31年	1898年1月	1898年8月	女學報	上海	潘旋、康同薇等、桂墅裏女學會・桂墅裏女學堂	
女学新報	女学新報社		1898年10月					
淑女	紫鸞社	明32年	1899年1月	1899	女報	上海	陳攝芬（楚南好），蘇報館	
家庭教育	家庭教育社		1899年3月					
令徳	令徳会本部		1899年7月					
流行	流行社		1899年9月					

女学雑誌・姫百合	姫百合社		1899年11月			
日本婦人	帝国婦人協会		1899年12月			
日本連家庭	家庭教育社	明33年	1900年1月			
婦女新聞	婦女新聞社		1900年5月			
女学世界	博文館	明34年	1901年1月			
をんな→なでしこ	大日本女学会		1901年1月			
婦人と子供	フレーベル会		1901年1月			
家庭	家庭発行所→家庭社⇒文明堂		1901年1月			
家庭	大日本仏教婦人会		1901年1月			
女子教育	女子教育研究会		1901年2月			
婦人世界	浪華婦人会		1901年6月			
農家之母社	農家之母		1901年8月			
国のはな	三友社		1901年8月			
仏教婦人	家庭発行所→家庭社		1901年11月			
娘評判	娘評判社	明35年	1902年1月	1902年5月	女学報→1899女報	東京女学報館、國民日報館
女芸	新進館⇒女芸学会		1902年3月			
新衣裳	高島屋飯田呉服店		1902年3月			
女界	白鳳社		1902年4月			
少女界	金港堂書籍株式会社⇒大洋社		1902年4月			
爱国婦人	爱国婦人会		1902年5月			
婦人界	金港堂書籍株式会社		1902年7月			
婦人	神戸婦人協会		1902年10月			
婦人文芸	秀英社	明36年	1903年1月	1903	嶺南女学新報(別名《女学新	広島 鴻活泉、周恵卿等
裁縫雑誌	東京裁縫学校出版部		1903年2月	1903	女子學報	広島
日本女学生	日本女学生会		1903年3月	1903年12月	女子世界	上海 上海小説林
母	日本母の会同盟会		1903年3月		女学報→1899女報	
家庭雑誌	堀利彦、由分社⇒家庭雑誌社⇒平民書房⇒家庭雑誌社		1903年4月			
家庭之女	羽仁もと子、内外出版協会⇒新公論社⇒家庭之女社⇒四方堂		1903年4月			
時好→みつき→タイムス	三井呉服店⇒三越呉服店		1903年8月			
料理世界	料理世界発行所		1903年8月			
女子教育	明治婦院⇒女子教育発行所⇒大日本女子教育会	明37年	1903年8月		女子世界	上海 丁初我、陳勳(陳以益)、秋蓮、常熟女子世界社

1920年代初頭における日本と中国の女性定期刊行物  
—呉覺農が紹介・論争した女性運動論からみる—

家事通信	家事通信社		1904年1月	1904	女岳花	上海	王妙如
二十世紀の婦人	北海道婦人同志会		1904年2月	1904	女兒魂	東京	抱真、清國留學生會館發行
大家庭	大日本高等女学会		1904年2月	1904	女子魂	東京	潘朴 (抱真女士)
明治の女子→女子青年界	日本基督教女子青年会		1904年5月	1904	婦孺報	広州	広州義學書局
淑女界	淑女協会		1904年5月				
家庭週報	桜楓会		1904年6月				
家庭の志るべ→流行	富山房		1904年7月				
美かげ←令徳	令徳会本部		1904年8月				
明治の母	明治の母会		1904年10月				
家庭雑誌・婦人	婦人社→仏教婦人会聯合本部		1904年10月				
家庭娯楽・衛生新報	衛生新報社		1904年12月				
女子文壇→処女	河井醉茗	明38年	1905年1月	1905	女學講義	成都	公里第二小學堂總發行所
新家庭	新家庭社		1905年1月	1905年8月	北京女報	北京	張均卿 (展雲)
家庭の果	新潟県女子教育会		1905年2月	1905	婦孺易知白話報	江蘇・阜寧	
日本の家庭	同文社		1905年3月	1905年4月	女界灯學報	広東・佛山	何志新、李穎園等
女学生	東洋女学生会		1905年5月	1905	女鏡報	広州	郭用達、容功備等
日本の少女	大日本少女会		1905年6月				
明治の家庭	明治の家庭社		1905年6月				
婦人画報→東洋婦人画報	近事画報社→独岳社→東京社→婦人画報發行所→婦人画報社→アシェント婦人画報社		1905年7月				
女子雑誌・ムラサキ	読売新聞日就社→ムラサキ社		1905年7月				
少女智識画報	近事画報社		1905年9月				
田園婦人	婦人農芸会→大日本婦人農芸会		1905年10月				
女学界	金曜社		1905年10月				
明治の婦人	明治の婦人社→宝永館書店		1905年11月				
なでしこ	大日本女学会		1905年11月				
婦人世界	実業之日本社→婦人世界社	明39年	1906年1月	1906	中日女學界	東京	燕斌
女子文芸	日本薬書会		1906年1月	1906年7月	女界月刊	上海	曾孟朴
流行→白木「タイムス」	白木屋呉服店		1906年1月				
家庭女学講義→婦人之友	家庭女学会		1906年4月				
女子学術	博報堂		1906年5月				
今様	松屋呉服店		1906年5月				
女学雑誌	明昇堂		1906年5月				

女学生	流行社				1906年6月				
少女	明治少女会				1906年6月				
をとめ	をとめ発行所⇒をとめ社				1906年6月				
薫風					1906年？月				
女子成功					1906年7月				
少女世界	博文館				1906年9月				
衣道楽→モーラ	伊藤呉服店				1906年9月				
家庭新報	家庭社				1906年9月				
女芸会	東京女子手芸教育会				1906年10月				
日本婦人	帝国妇人協会出版部				1906年10月				
女子道	女子道編輯部				1906年11月				
簡易生活	簡易生活社				1906年11月				
世界婦人	福田英子	明40年		新女子世界	1907年8月		上海	陳勤	
家庭文芸←文芸界	金港堂書籍株式会社			中國新女界雜誌	1907年1月		東京	燕斌（練石女士）	
京雄女誌	京雄女誌社			中國女報	1907年1月		上海	秋瑾、陳伯平	
衣裳	下村呉服店⇒大丸呉服店			神州女報	1907年12月		上海	陳以益、吳芝瑛、徐寄塵	
貴婦人	婦女通信社⇒貴婦人社			天足會報	1907年2月		上海	沈仲禮、管西園、中國天足會	
家庭衛生	家庭衛生雜誌社			天義報	1907年3月		東京	何震、劉師培、陸松權	
新婦人	新婦人社			婦孺雜誌	1907		広東・番禺	陳誠	
婦人の花	明治堂			中國婦人會小雜誌	1907		北京	燕武等、北京中國婦人會	
				中國婦女會報	1907		北京	杜薌州等、中國婦女會	
				女學報	1907年6月		北京	蒼佑臣	
				二十世紀之中國女子	1907		東京	恨海（田桐）女士、河南學生會	
				星期女報	1907年6月		北京	王淑媛	
				天足月報	1907		上海	沈仲禮、中國天足會	
				女子世界	1907		上海	陳勤	
家庭之友⇒婦人之友	羽仁もと子	明41年		天足會年報	1908		上海	沈仲禮、中國天足會	
家庭講話				湖北女學日報	1908		武昌	馮德生	
少女の友	実業之日本社			婦孺日報	1908		広州	陳誠	
家庭雑誌社	家庭雑誌社			女報	1908		上海	陳志群	
家庭雑誌社	大井呉服店			惠興女學報	1908		杭州	中權居士總編輯、杭州惠興女學校	
流行の日本									
大和なでしこ	大日本女学会								
家庭雑誌	家庭雑誌社								

1920年代初頭における日本と中国の女性定期刊行物  
— 岩波農が紹介・論争した女性運動論からみる —

みつこしタイムス	三越呉服店		1908年6月						
婦人くらぶ	柴明社→婦人倶楽部社		1908年10月						
家庭新報		明42年	1909年？月	女報	1909年1月	上海	陳以益、謝震、女報社		
新女界	新人社		1909年4月	女學生雜誌	1909	上海	楊白民		
家庭	精美堂		1909年4月						
娘子軍	娘子軍		1909年4月						
姉妹	國學院大學出版部		1909年6月						
婦女新世界	婦女新界社		1909年6月						
婦人雜誌・みさを	陸海軍將校婦人会		1909年6月						
少女→お伽世界	女子文壇社		1909年9月						
婦人界			1909/?/1						
新家庭	東京毎日新聞社		1909年9月						
新家庭	新家庭雜誌社		1909年11月						
新民家庭	報徳会	明43年	1910年1月	女學生	1910年3月	上海	尹銳志、城東女學校編輯		
婦人雜誌フラウ	フラウ社		1910年1月	婦女星期錄	1910	香港	洪舜英		
婦女界	同文社→婦女界出版社		1910年3月	中國婦女改良會報	1910	天津	英淑仲、丁本民、天津婦女改良會		
新ホーム	新ホーム社		1910年3月	無錫鏡志女學雜誌	1910年6月	無錫	無錫鏡志女學		
婦女界	同文社→婦女界社→婦女界出版社 式会社→婦女界出版社		1910年3月						
家庭時報	家庭時報社		1910年8月						
少女文芸	少女文芸会		1910年8月						
いけはな	生華新聞社		1910年11月						
婦人乃麗	婦人社	明44年	1911年1月	婦女時報	1911年6月	上海	包天笑、陳冷血		
女學生	文光堂		1911年1月	女界雜誌	1911	上海			
みつこし→三越	三越呉服店→三越		1911年3月	婦女日報	1911	上海			
新婦人	聚精堂→至誠堂→新婦人社		1911/10/1	留日女學會雜誌	1911年5月	東京	唐群英		
家庭のをしへ	日本家庭会		1911年5月	婦女雜誌	1911	北京			
女學生画報→女性	女學生画報社		1911年8月						
青籜	青籜社機關誌	明44年	1911年9月						
婦人雜誌	増沢出版社		1911年11月						
新姉妹	新姉妹社		1911年12月						
淑女かかみ	入念舎		1911年12月						
新女学	大倉書店	明45年	1912年1月	大漢報	1912	蘇州	張昭漢、陳鴻璧		
家庭之華	家庭之華社		1912年1月	民國女報	1912年12月	上海	劉舜英、上海女子參政會編輯		

少女画報	東京社⇒新集社⇒少女画報社		1912年1月	1912年4月	女子國學報	天津	潘連璧、伍崇敏、天津女子國學會
北陸家庭	北陸家庭雜誌社		1912年3月	1912年4月	女鐸(報)	上海	[美] 樂亮月、李冠芳、劉美麗、廣學會
淑女画報	博文館		1912年4月	1912	北京女學日報	北京	
女子の友	大日本美術女学会		1912年5月	1912年12月	女子白話旬報→女子白話報	北京	唐群英、沈南雅→陳聖任、女子白話報社
家庭バック	樂天社		1912年7月	1912	楊州女子公學女子月報	楊州	郭聖忍
家庭週報復刊	桜風會機關誌		1912年7月	1912年9月	中華女報	上海	湯雲秋
婦人評論	朝報社⇒婦人評論社	大正元	1912年9月	1912年11月	神州女報	上海	張漢昭、湯國黎⇒楊季威、談社英、神州女報社
女子青年界	日本基督教女子青年會		1912年9月	1912年5月	女權	上海	張漢昭、姜輔英
				1912年12月	女權月報	上海	文典、樂勤等
					女學日報	北京	沈佩貞等
				1912	女界報	成都	曾蘭(吳虞之妻)
				1912年6月	女界	北京	《大自由報》副刊・後《女界新聞》と改名？
大正婦人	大正婦人社	大正年	1913年1月	1913	青年女子星期報	浙江	
大正婦女社会	大正婦女社会		1913年1月	1913年4月	萬國女子參政會旬報	上海	萬國女子參政會中國部(張漢英、陳德曜等創設)
少女	時事新報社		1913年1月		(改) 萬國女子參政會月刊		張漢英、任麗播、中華實業報社
日本之婦人	經濟雜誌社		1913年1月	1913	自治學生	長沙	長沙自治女校學生自治會
家	家社		1913年4月	1913	女權日報	湖南	唐群英、張漢英等
料理の友→食生活	大日本料理研究会⇒料理の友社		1913年4月		女子白話報←1912女子白話旬報		
新真婦人	新真婦人会機關誌		1913年5月				
家庭之園芸	家庭之園芸社		1913年6月				
処女→現代婦人	女子文壇者		1913年9月				
家庭と教育	養賢堂		1913年10月				
女子文壇	婦人文芸社		1913年10月				
女學雜誌	女學雜誌社		1913年11月				
家庭タイムス	家庭タイムス社		1913年11月				
番紅花	東雲堂	大正年	1914年3月	1914	香艷雜誌	上海	新舊廢物
淑女世界	淑女世界社		1914年4月	1914年12月	女子世界	上海	天虛我生(陳蝶仙)、醉蝶、中華圖書館
婦人文芸	国母社		1914年5月	1914年10月	婦女鑑	成都	婦女鑑雜誌社
婦人の神戸	婦人の神戸社		1914年9月	1914	眉語	上海	高劍華
家庭乃花	家庭乃花社		1914年10月				
貞節	内外圖書文具合資会社		1914年12月				
家庭雜誌・ホーム	家庭雜誌社	大正年	1915年1月	1915年1月	婦女雜誌	上海	王蘊章、胡彬夏、章錫琛、商務印書館
料理と作法・女學顧問	東京御茶女学校出版部		1915年3月	1915	家庭	成都	家庭雜誌編輯部



1920年代初頭における日本と中国の女性定期刊行物  
—呉覺農が紹介・論争した女性運動論からみる—

新少女	婦人之友社			1915年4月	1915年1月	女子雜誌	上海	上海女子雜誌社, 廣益書局發行
女の世界	実業の世界社			1915年5月	1915年1月	中華婦女界	上海	梁啓超、上海中華書局
団欒	団欒社			1915年6月	1915	江蘇省立第一女子師範學校校友會叢刊	蘇州	同校校友會
家庭雜誌	博文館			1915年6月	1915	家庭雜誌	上海	唐真如
婦人雜誌	婦人評論社→婦人雜誌社			1915年7月				
少女の園	日本少女園			1915年9月				
家庭世界	大日本家庭教育会			1915年9月				
日本婦人	日本婦人社			1915年9月				
きやらわ	京和俱樂部			1915年10月				
料理世界	料理世界社			1915年10月				
婦人週報	小橋三四子、婦人週報社			1915年11月				
女王	女王会→第三帝國社			1915年11月				
婦人と社会	五人社			1915/12/1、11月?				
家庭と玩具	家庭俱樂部			1915年11月				
婦人公論	中央公論社→中央公論新社	大5年		1916年1月	1916	直隸第一女師範校校友會會報	天津	白眉初
をとめ	千草館			1916年1月	1916	青年女報	上海	上海基督教婦女青年總會
新女学	東光園支店→東光園本店			1916年1月	1916	益世女報	天津	天津益世報館
良妻賢母	良妻賢母発行社			1916年1月				
関西婦人画報	関西婦人画報社			1916年1月				
新家庭	玄文社			1916年3月				
大陸婦人界 (朝鮮最初の女性雑誌)				1916年3月				
家庭文学	家庭文学社			1916年4月				
現代婦人	女子文壇社			1916年6月				
婦人雑誌・あかつき	あかつき社			1916年6月				
家庭と趣味←家庭と玩具	家庭俱樂部			1916年6月				
ピアトリス(文芸雑誌)	ピアトリス社			1916年7月				
女のカー→処女→勤労女性	用力社			1916年7月				
女学生雑誌	団欒社			1916年7月				
友愛婦人	友愛会本部			1916年8月				
現代の婦人	現代の婦人社			1916年8月				
家庭	家庭社			1916年9月				
少女号	小学新報社→新報社			1916年12月				
婦人	白水社	大5年		1917年1月	1917	江蘇省立第一女子師範學校校友會雜誌	南京	同校校友會學芸部

主婦之女	東京家政研究会⇒主婦之友社⇒主婦の友社	1917年3月	青年女報→女青年報	上海	中華基督教女青年會協會
我が家	帝国在郷軍人会本部	1917年3月	婦女旬刊	杭州	杭州中華婦女學社
才媛文壇		1917年4月			
処女文壇		1917年5月			
家庭及学校		1917年6月			
婦人界	東京社	1917年9月			
明るい家	明るい家発行所同人⇒明るい家社	1917年10月			
婦女世界	婦女世界社	1918年1月			
女子文芸	女子文芸社	1918年3月			
流行世界→婦人タイムス	国粹社	1918年4月			
女子教育研究		1918年5月			
希望	希望社	1918年6月			
女流文芸雑誌・赤光	赤光社	1918年6月			
家庭顧問→新婦人	化粧調査会⇒家庭顧問社	1918年8月			
婦人タイムス	国粹社⇒婦人タイムス社	1918年8月			
婦人問題	婦人問題研究会	1918年10月			
婦人家庭雑誌→婦人家庭	婦人家庭雑誌社	1918年10月			
処女之友→女子青年	処女会中央部	1918年11月			
関西婦人	関西婦人新聞社⇒関西婦人社	1918年11月			
婦女写真	東光園	1919年1月	婦女	北京	北平女青年社、《北平日報》副刊
新女鑑	女子同協会出版部	1919年1月	醒世	天津	直隸第一女師範學生團
婦女修誌	至誠院	1919年6月	平民	天津	天津女界愛國同志會
こども雑誌	女子文壇社	1919年7月	女界鍾	湖南	湖南第一女子師範
女性	四方堂	1919年10月	勵進會旬刊	湖南	湖南第一女子師範
			婦女週刊	上海	張默君、《時報》副刊
			婦女問題	北京	《晨報》副刊
			北京女子高等師範文芸會刊	北京	
			女子愛国日報	上海	
			振坤女子日報	上海	黄振坤、上海振坤女子日報館
			少年中國・婦女鑑	北京	《少年中國》(月刊) 1:4特別號
			上海女界聯合會旬報	上海	上海女界聯合會
愛国婦人	愛国婦人発行所⇒愛国婦人会	1920年1月	家庭研究	上海	上海家庭研究社
家庭の友	金の鳥社	1920年1月	家庭研究	北京	

1920年代初頭における日本と中国の女性定期刊行物  
— 呉覺農が紹介・論争した女性運動論からみる —

婦人と新社会	山田わか、東洋出版社→婦人と新社会社		1920年2月	新婦女		上海	上海務本女子中學教師編、上海新婦女雜誌社
新婦人	家庭顧問社		1920年3月	女界鐸		上海	上海務本女子中學四年級編
家事研究	目黒書店		1920年4月	婦女評論		蘇州	
新生活	共益社		1920年5月	北京女高師半月刊		北京	同校學生自治會
女学生	研究社		1920年5月	女子週刊		北京	益世報館、《北京益世報》副刊
母←新教育、→母と子	成蹊学園出版部		1920年6月	解放畫報		上海	上海新民図書館、解放畫報社
母之友	婦女界社		1920年7月				
女性日本人	政教社		1920年9月				
婦人家庭→新女性	ダイモモンド社		1920年9月				
婦人くらぶ→婦人倶楽部	大日本雄弁会→大日本雄弁会講談社→講談社		1920年10月				
女性同盟	新婦人協会		1920年10月				
新女性	ダイモモンド社	大10号	1921年4月	婦女趣聞叢報		上海	上海華文圖書館
みとりの友	みとりの友発行所		1921年4月	勞動與婦女		広州	沈玄盧、陳獨秀等
母と子	成蹊学園出版部		1921年6月	婦女聲		上海	李達、上海中華女界聯合會
文化之婦人	文化之婦人社		1921年6月	婦女評論		上海	婦女評論社、上海《民國日報》副刊
家庭の花←赤い花	家庭之花社		1921年8月	鳳藻 The Phoenix		上海	聖瑪利亞女校
婦人雜誌	婦人雜誌社		1921年11月				
新女性→婦人界→新らしき婦人界	新女性社→婦人界		1921年11月				
真婦人	仏教婦人社		1921年11月				
少女界	キンノツノ社→越山堂		1921年11月				
近代生活	となみ社		1921年12月				
趣味之婦人→趣味の婦人	趣味之婦人社→趣味の婦人社	大11号	1922年1月	婦女半月刊		蔣鳳子、浙江臨海台屬女子師範學校	
家庭洋服画報	家庭洋服画報社		1922年1月	婦女與家庭		上海	談社英、《中華新報》副刊
家庭の知識	家庭の知識社		1922年1月	現代婦女		上海	婦女問題研究会、中華節制研究会、《時事新報》副刊
良婦之友	春陽堂→良婦之友社		1922年1月	北京女學界聯合會彙刊		北京	
家庭界	萬象社		1922年1月	北京女子高等師範附屬中學校學生會雜誌		北京	
若き婦人	文光堂		1922年1月	辟才雜誌		北京	北京女子高等師範附屬中學校友會
趣味の家庭	国際情報社		1922年1月	新女	刊	上海	沈生今
微笑	花園婦人会		1922年2月	The new Women Monthly		北京	《晨光》雜誌專欄
世帯	世帯発行所		1922年3月	女子參政論壇		上海	中華婦女節制協會、劉王立明
淑女界	淑女界社		1922年3月	女青年		上海	上海基督教女青年會團協會、張采萍、蔡葵
家庭之友	家庭之友社		1922年3月	女子家事教育		上海	上海中華職業教育社、教育與職業雜誌專刊

処女地 (若い女性の文芸雑誌)	島崎藤村中心、処女地社		1922年4月	1922年1月	女子職業教育	上海	上海中華職業教育社、教育與職業雜誌專刊
令女界	寶文館		1922年4月	1922	中華基督教節制會季刊	上海	
女性	ブロン社		1922年5月	1922	新婦女	広州	
主婦			1922年6月	1922	家庭雜誌	上海	上海世界書局
少女の花	日本飛行研究会 正光社		1922年7月				
少女の国	正光社		1922年8月				
婦人雜誌・藤袴	芳蘭社		1922年10月				
少女タイムス	少女タイムス社		1922年10月				
真宗婦人	大日本真宗宣伝協会		1922年10月				
女性改造			1922年10月				
少女物語	ポケット講談社		1922年11月				
廣嶋婦女界	廣嶋県聯合婦人会本部		1922年11月				
少女俱樂部→少女クラブ	大日本雄弁会⇒大日本雄弁会講談社→講談社	大12年	1923年1月	1923年2月	女國民	上海	上海女子參政會
のぞみ	希望社		1923年1月	1923	女青年	廣州	廣州基督教女青年會
家庭俱樂部	家庭俱樂部		1923年1月	1923	快樂家庭	天津	天津光華印刷公司
手芸の友	和洋手芸普及会		1923年1月	1923	東方小説	上海	上海東方女子広告社
女性美	東京婦人結髪業組合聯合出版部		1923年1月	1923年7月	女權	上海	中華婦女協會
日々のあゆみ	組合製糸研究社		1923年4月	1923	女學界	雲南	雲南省立女子中學校師範職業小學常校及幼稚園
女学の友	早稲田大学出版部		1923年4月	1923年8月	婦女週報	上海	上海婦女問題研究會、上海《民國日報》副刊
文化生活	文化普及会		1923年5月	1923年4月	女星 The Ladies Star	天津	女星社・李峙山、《新民意報》副刊
近代の結婚	近代の結婚社		1923年5月	1923	女黨	江蘇・吳興 <sup>2)</sup>	諸聖閣中央大學區立女子職業學校學友會
職業婦人→婦人運動	職業婦人社		1923年6月	1923	姉妹旬刊	天津	滴露社、《天津新民意報》副刊
現代之家庭	現代之家庭社		1923年6月				
ウーマン・カレント	三宅やす子、ウーマン・カレント社		1923年6月				
女人芸術	長谷川時雨、女人芸術社		1923年7月				
処女之園	処女之園社		1923年7月				
化粧之友	化粧之友社		1923年8月				
装飾と家庭	家庭と装飾社		1923年9月				
主婦俱樂部	主婦俱樂部社		1923年9月				
婦人と趣味・技芸	技芸社		1923年9月				
向上之婦人	帝國文化協會	大13年	1924年3月	1924年1月	婦女日報	天津	李峙山
婦人と労働→婦人労働	職業婦人社		1924年4月	1924	國立北京女子師範大學週刊	北京	(女師大通刊)
婦人グラフ	国際情報社		1924年5月	1924年9月	中國女子日日新聞	北京	
				1924年12月	婦女週刊	北京	薔薇社 石評梅、《京報》副刊

1920年代初頭における日本と中国の女性定期刊行物  
— 岩見農が紹介・論争した女性運動論からみる —

婦人と職業	時代研究社		1924年5月	愛國女校年刊	上海	愛國女校
新興婦人	新興婦人社		1924年6月	婦女合作專號	上海	復旦大學平民社
少女星	大阪開成館→少女星発行所		1924年8月	紅玫瑰	上海	嚴燭鶴、趙君狂
愛の泉	愛の泉社		1924年9月			
泉の花	希望社		1924年10月			
処女の光	処女の光社		1924年10月			
婦人と子供	読売新聞社		1924年11月			
婦人→婦人朝日→週刊婦人朝日	全関西婦人聯合会→朝日新聞社		1924年12月			
アカツキ	仏教女子青年会	大14年	1925年1月	婦人界→婦女週刊→薔薇	北京	張友鸞、《世界日報》副刊
家庭婦人	日本青年社		1925年1月	婦女週刊	北京	成冰女士、《世界日報》副刊
処女界	愛国処女会本部		1925年1月	薔薇	北京	薔薇社、《世界日報》副刊
関東婦人	関東婦人社		1925年1月	女友	天津	浙江省立女子中學校校友會
婦人講座	婦人講座社		1925年5月	婦女運動同盟會直隸支部特刊	杭州	
婦人の国	新潮社		1925年5月	武漢婦女	武汉	袁溥之、趙君陶
家の光	新朝社		1925年5月	武漢婦女	武汉	
美容	美容社		1925年5月	広東婦女揭發協會會刊	広州	張惠影、王一知
女学文芸	女学文芸社		1925年5月	女子日報	上海	梁孟(經理)、秦繼藩、上海女子日報館
家事と衛生	家事衛生研究会		1925年5月	婦人週報	上海	上海中國文學會
婦人運動	職業婦人社		1925年7月	女人週報	上海	王鴻文、葉國英
女性之光	女性之光社		1925年9月	婦女	梧州	《緬甸新報》副刊
若草	寶文館		1925年10月	婦女之光	梧州	広西婦女連合會
			1925年12月	中國婦女	上海	上海各界婦女連合會・楊之華、賀敬揮
			1925年12月	家政選刊→蕭氏家言選刊→蕭氏家言旬刊	?	
少女の国	成海堂→少女の国社	大15年	1926年1月	婦女鍾	北平	劉清陽
婦人の日本	日本婦人教育會		1926年2月	婦女與文學	北京	billi社主編、《世界日報》副刊
未来			1926年3月	婦女之聲	広州	國民黨中央婦女部・黎沛華
婦人之天地→婦人の天地	大阪市婦人聯合会		1926年3月	新女性	上海	上海婦女問題研究會・章錫琛
少女文芸	新報社		1926年4月	青年婦女	長沙	青年婦女學芸社
連合婦人	東京連合婦人会		1926年5月	女青年→女青年報	上海	中華基督教女青年會全國協會
婦人文化→精神文化	中山女性文化研究所		1926年5月	婦女先鋒	長沙	湖南女界連合會・鄭傑
小令女	寶文館		1926年5月	吳江婦女	上海	長応春、上海吳江婦女月刊社
婦人と生活	婦人同志俱樂部→婦人と生活社		1926年6月	広東婦女	広州	広東女權運動大同盟總會出版社
母の講座	東洋家庭幼稚園		1926年6月	京師公立第一女中學校月刊	北京	京師公立第一女中學校

地の塩	東京基督教女子青年会		1926年7月	1926年6月	革命婦女	南寧	広西國民黨省婦女部
レディーズジャーナル	レディーズジャーナル社		1926年9月	1926年9月	婦女之友	北京	婦女之友社、中共北方區委國民黨北京特別市黨
女子の世界	女子の世界社		1926年11月	1926年10月	女伴	上海	女性半月刊社
				1926年12月	婚姻	上海	婚姻半月刊社、上海婚姻報館
				1926年12月	家庭報	上海	上海家庭報社
				1926	梅県婦女	梅県	広東婦協梅県分會
				1926年1月	現代婦女	南寧	広西婦女連合會
				1926	広州市國民黨婦女會會刊	広州	國民黨広州市婦女部
				1926年4月	婦女週刊←1925婦女界	北京	《世界日報》副刊
				1926年1月	薔薇←1925婦女界	北京	《世界日報》副刊
				1926年3月	民星	上海	上海廣學會・薄玉珍、原名《女星》
				1926年5月	女人	上海	上海小型出版社編行
				1926年6月	光明	上海	中國清難會
				1926年9月	女子日報	上海	劉王立明
				1926年10月	閨友	上海	閨友週刊社

出典：「女性誌創刊年表」（『女性誌の源流』所収）及び「中国の女性定期刊行物創刊年表」（『婦女雜誌』からみる近代中国女性）所収）から作成。